



TITLE:

東南亞細亞に於ける黒陶、彩陶並に紅陶：金關博士の論文を讀みて

AUTHOR(S):

鹿野, 忠雄

---

CITATION:

鹿野, 忠雄. 東南亞細亞に於ける黒陶、彩陶並に紅陶：金關博士の論文を讀みて. 東洋史研究 1945, 9(3): 142-151

ISSUE DATE:

1945-11-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/145828>

RIGHT:

# 東南亞細亞に於ける黒陶、彩陶並に紅陶

——金關博士の論文を讀みて——

鹿 野 忠 雄

最近讀んだ東亞先史學の論文の中で、金關丈夫博士<sup>①</sup>の「臺灣先史時代に於ける北方文化の影響」は、夫れが筆者の特に關心を有する臺灣に就いてのもの丈に、殊更筆者の興味を喚起した。同論文は臺灣に新發見の彩陶を注意し、併せて黒陶、紅陶に就て述べ、之等三種の土器を北方系（北支那的の意）なりと認められ、臺灣先史時代に北方文化要素の混入することを主張されてゐる。臺灣先史遺物にフィリッピン其他南方島嶼に認められず、支那大陸に優勢なる各種の遺物が存在する事に就て、マニラ滯在中殊更痛感し、歸來後、「臺灣石器土器に見られる支那大陸系要素」<sup>②</sup>を執筆した筆者としては、同博士の説に對しては全く賛成であつて、有力なる支持者を得た感がし、力強く感ずる次第

である。然しながら、黒陶、彩陶、紅陶に關しては尙論すべきものがあり、夫れと同一又は近似せる土器が東南亞細亞の各地から發掘報告せられて居り、將來此の問題は東南亞細亞に於て最も注目す可きものゝ一に發展する様に思はれるので、次に現在筆者が知る範圍に於て、前掲三種の土器に就て知見を披瀝し、今後の注意を喚起すると共に大方の御教示にあづかり度いと思ふ。

## 一 黒 陶

臺灣に於て所謂黒陶を最初に發見したのは國分直一氏であつて、最近同氏は臺南、高雄兩州下に於ける多數の黒陶遺跡を發表してゐる。金關博士<sup>③</sup>は國分氏の所

藏品を一見して、支那の黒陶に關係あるを指摘せられたが、筆者も兩者の關係は疑ないものと思ふ。但し兩者の精細なる實物比較は試みて居られない様で、今後一層の研究が望ましい。筆者も國分氏の東道によりて烏山頭遺跡を訪ひ、多數の黒陶破片を得たが、其の文様には刻線文、刷毛目文、凹點文等があり、筆者の知る範圍に於て、同地方には縄文は赤色土器に認められ、黒陶にはない様である。黒陶は臺灣西海岸殊に臺南地方に多いらしい。然し同種の土環は臺北圓山介塚、墾丁遺跡、並に火燒島、油子湖遺跡より出土して居る。之等は交易によるものかも知れぬが、現在の知識に於て黒陶の分布中心は臺南地方にありと言つて良いであらう。

支那本土に於ける黒陶分布地の南限は浙江省杭州附近が從來知られて居たが、更に南方にも及んで居る様で、林教授<sup>⑤</sup>其他は福建省武平遺跡より黒陶を報告して居る。又スコッフィールド<sup>⑥</sup>が香港の石壁遺跡に關する論文中、Blackjar とせるものは少くも黒陶に關係あるものらしい。佛印には佛蘭西學者の多くの努力に拘らず發見されて居ないが、今後の調査によつては其の

發見は充分期待出来る。フィリッピンには認められない様で、少くもペイヤ教授の蒐集品には見ない。之れを要するに現在の知識に於ては、黒陶は支那大陸系要素と認む可きものであるが、臺灣に導入された経路に就ては、尙今後の研究に待つところが多いであらう。

## 二 彩 陶

臺灣に於ける彩陶は之れ又國分直一氏により初めて澎湖島良文溝遺跡より發見された。夫れは口の廣い赤色の壺形土器(?)の破片で、胴部には縄文が施文せられ、其の口唇部に紅色の塗料を以て、太い三本づゝの線(此の線は口唇部の縁に直角)が若干の間隔を置いて描かれて居る。又國分氏が桃子園遺跡<sup>⑦</sup>より得られた土器片中、廣口有頸壺の頸部破片、並に高坯の盤の二、三破片に平行直線による水平並に斜文櫛目文(前者)や、飛白式に置かれた平行直線斜行文(後者)が之れ又紅色塗料で描かれたのが發見された。又大肚溪北岸社脚遺跡よりも國分、西村兩氏並に金剛博士により、一種の彩陶破片が發掘されたが、之れは前掲のもの

は稍趣を異にし、黒色塗料を用ひて櫛目文並に網目文が描かれて居る。

彩陶の分布地に就ては、北支(河南・山西・陝西三省)を中心とし、東は滿洲國熱河省、南滿洲を経て北鮮雄基介縁に及び、西は齊家坪、辛店、馬家窯、半山墓地、朱家窯、馬廠等の甘肅、青海地方を経て露領トルキスタン、西印度のモヘンジョダロ、メソポタミヤ、南露、西歐、地中海沿岸に連る事は周知の如くであるが、楊子江沿岸並に夫れ以南に於ては從來發見例なく、更に山東、江蘇、安徽三省にも報告がない。臺灣が眞に北支系の彩陶なりとすれば、臺灣は不連續的分布を示し、其の南限を示す事は明かである。

然しながらマグリオニ師<sup>⑧</sup>は最近廣東省海豐より Painted Pottery の發見を報じて居るのは注目に値す可く其の詳細に就て未だ知り得ないのは残念である。マグリオニ師の報告によつて彩陶が南方にも見出さるゝ可能性が喚起され、更に南方を注意すれば、若干の例を見出すのである。佛印に彩陶が發見されるか否かは筆者未だ之れを詳にしないが、更に南下して馬來半島ケダ州の Bulang に於ける岩蔭避難所から、

コリンダス氏<sup>⑨</sup>は彩陶の一斷片を發掘して居る(同氏論文 Pl. VII, fig. 33)。即ち夫れは可なり大きな壺の一斷片と想像され、地色は鮮黃色であるが、之れに赤色塗料を以て廣い帶狀文と之れに直角に接する細線が描かれて居るのが窺はれる。

又エヴァンス氏<sup>⑩</sup>が紹介したネグミスミラン州 Kuala Piliuh に於ける蒐集品(タイピン博物館所藏)なる注口瓶(同氏著書 pl. xxx)には、其の胴部に縱走する六本づつの並行細線群が若干の間隔をおいてめぐらされて居るのが認められ、夫れが塗料によつて描かれたものである事は疑ないが、如何なる色彩であるかは明かでない。更にフリッピンに於て或る種の彩陶がある事は、クルーパー博士<sup>⑪</sup>の著書(同書中第一七圖)によつて知られる。即ちモロ族の蓋附土器、並にピコル族の臺附平鉢には白色又は白色と赤色の描畫が認められる。筆者がマニラ科學局博物館所藏のフリッピン土器を實見した處では、前掲のもの、他に、ビサヤ族にもあり、殊にピコル族土器には彩陶が數多く見られた。其の器形は蓋附煮沸壺、圓底碗其他があり、黃褐色の地色に濃赤褐色、白色、黒色の塗料を以て描かれてゐ

る。

### 三 紅 陶

金關博士は臺灣先史遺物に於ける「北方的様相の第三」として紅陶を挙げられた。夫して其の出土地として、1 桃子園、2 二苓（高雄州鳳山郡小港庄）、3 烏山頭、4 花崗山、5 新城、6 石坑、7 カロラン、8 都巒、9 圓山介塚、10 墾丁の一〇遺跡を挙げられて居る。(1)より6までは、現在材料が手許になく詳細な比較が出来ないので何とも言ひ得ないが、(6)より(10)までは何れも筆者の手元には標本があり、更に火焼島油子湖並に臺東附近の遺跡發掘の土器片も所藏して居る。臺灣の紅陶に關しては已に一文を草したので簡単に述べるが、臺灣の紅陶と稱し得るものを詳細に觀察すれば、夫れには幾つかの種類が認められるのである。今筆者所藏の材料に就てのみ述べれば次の四類に分つ事が出来る。

第一類—火焼島油子湖遺跡、都巒遺跡等臺灣東海岸より出土するもので、焼成は不充分、粗雜物を混へ、表面は赤味を帯びた煉火色の塗料を相當厚く塗り研磨

せられて居る。又之れには直徑三耗程の竹管(?)捺印による圈點文が認められる事がある。

第二類—臺東附近のグノ遺跡より出土するもので、土器の表面に第一類同様の赤色塗料が塗られ研磨せられて居るが、其の塗り方は薄く、且土器自身は焼成充分で極めて堅硬である。而して直線平行文、波狀組合せ文等の刻線文が施文されて居る。

第三類—圓山介塚より出土するもので、赤色塗料は前二者と稍異り、土器の材料も區別される。

第四類—墾丁遺跡より出土するもので、前三者とは大いに趣を異にし、焼成充分で外面内部共に一樣なる黄褐色を呈し、塗料も同色に近く、塗り方も薄く、研磨せられて居る。

斯くの如く、筆者所藏のものに就ても、其の間に區別を求め得るから、一概に紅陶と言つても、今後比較研究が必要である。

紅陶は周知の如く、北支、滿洲より朝鮮に及び我邦彌生式土器にも認められ、一見北方系の如くにも見られ易いが、南方にも紅陶は少からず發見せられる。先づ佛印に於ては、安南のサヒュイン遺跡、デククチ岩

陰避難所、パウトロ遺跡等よりバルマンチェー、コラニ、バット、ヤンセ等により報告されて居る。フィリッピンに於て紅陶は同島鐵器時代末期に初めて出現する事が報告されて居る。而してペイヤー教授の談によれば、紅陶は初期鐵器時代の特徴的遺物であり、更に下降して Porcelain Age 初期に及ぶ。紅陶を出土する遺跡としては、ブラカン、リサル兩州境の W 遺跡、ノヴァリッチェス遺跡があり、更にリサル州に六、ブラカン州に二の遺跡あり、其の或るものには稻莖を押印した圈點文が認められると言ふ。而してセブ島舊家の或るものには古代傳承品として紅陶（一八世紀のもの）が保存せられると言ふ。更に此の紅陶の流れを汲むと思はれるものは、フィリッピンの田舎に今尙製作されて居る様で、クローは「土器に光澤を與へるために目の細かい赤色スリップ（恐らくオーカー）を塗り、介で研磨する」と述べて居る。更に此の種のもは東印度にも一般的のものらしく、齋藤正雄氏は「只器面に光澤を附けるために樹脂を熔着させる方法」は廣く行はれてゐる。是は樹脂の粉末が窯内で溶解し、暗褐色の粘膜狀の光澤層を残すのである」と書か

れて居る。

インドネシアを離れて、太平洋諸島に眼を轉すれば、先づ我がミクロネシアに紅陶が認められる。鈴木正雄氏はバラウ島の一島なる Umpagal 島の一石灰洞より、中に石器と介器を藏する圓底の蓋附平碗を發見されたが、夫れは徑三〇浬、内外面共に赤色塗料（多量の鐵分を含む）が塗られて居る。而して更に南に及び、フィジー諸島に樹脂を材料とする赤色塗料を以てする紅陶が製作されて居る事はマクラン其他が報告する如くである。

上述によつて赤色塗料を用ひた紅陶は、北方系と簡單に一言し去るには、いさゝか不穩當であつて南方地域にも略普遍的なる事が知られた事と思はれる。而して土器製作の方法並に赤色塗料に就ても若干の變化がある事が察せられる。臺灣出土の紅陶の如きも夫れに幾種類がある事が明かであるが、之等は實物によつて隣接諸地方のものに比較する事が要求される。前掲第一類の臺灣紅陶をフィリッピン鐵器時代後期遺跡出土と稱せられる紅陶に比較したところ、夫れ等は寸分違はず、何等差異を認め得ない事を知つた。よつて兩者

は恐らく直接的の關係があり、臺灣紅陶の或るものはフィリッピンより導入されたと見るを適當と考へる。ヤンセ博士が佛印より紹介した圈點文ある紅陶の寫眞は、一見第一類に酷似するが、若し第一類と同一なりとすれば、此の種の紅陶はフィリッピン、佛印、臺灣の三地方に廣い分布を示す事となるが、未だ實物比較を行ふ機會を得ず、従つて第一類紅陶はフィリッピンに關係ありとするを、現在穩當と考へるものである。

#### 四 印度に於ける黑陶紅陶並に彩陶

筆者は實物を見た事もないし、又其の詳細に就ても知らないが、印度先史學の文獻中には、何れも磨研された黑色、紅色、並に一種の彩陶が諸遺跡から出土する事が報ぜられてゐる。最後の彩陶の如きは Polished black-and-red Pottery と通稱せられて居り、紅陶で其の上部と内面が黑色塗料で塗られて居ると言はれる。

今筆者の手許にある資料によつて、夫れ等三種の土器出土状態を見るに、マドラスのタンガル遺跡<sup>⑧</sup>から、三種共に出るが何れも埋葬に用ひられたものであり、

鐵器、硝子器が伴出して居る。又同じくマドラスのカルグマライ附近遺跡<sup>⑨</sup>からも三種の土器が出る。南印度のデッカン地方<sup>⑩</sup>にも黑陶、彩陶、紅陶が出土し、前二者は Pyriform urn sites に非常に多いが、Pottery cist sites には少く、stone cist sites には一層少くと言はれる。又一九三一年印度内務調査書を骨子として書かれた三森定男氏の著書には、ニルギリ丘陵の巨石遺跡より赤色と黒色の土器が青銅器と鐵器に伴出する事、ハント氏がライギル發見の石棺群より磨研赤色土器と赤色の底部を有つた黒色土器を發掘した事、ショラプール土侯國に於て積石塚や石室墳より銅、青銅、鐵器と共に赤色と黒色の土器が發掘された事、並にロングハーストがサティアマシガラムの積石塚と石棺とより、鐵器と玉類と共に赤色と黒色の土器が發掘された事等の記事が見える。

前掲三種印度土器の詳細なる性情に就ては其の記事に接し得ないが、ブレンダーレイ<sup>⑪</sup>がワイナード地方より得た黑陶に就ての説明によれば、燒成火度相當高く、其の組成は硅酸(五〇・九五%)、酸化鉛(痕跡)、酸化銅(四・八七%)、酸化鐵(一三・七七%)、アル

ミナ（一三・七三％）、石灰（三・五三％）、苦土（痕跡）を示すと言ふ。何分印度の前掲黒陶、彩陶、並に紅陶に就ては筆者未だ之れを詳にしないので、之れ以上言及する事が出来ないが、其の發見地が東南亞細亞文化供給地の一なる印度である次に、之等の土器の探究は東亞先史學のためにも是非必要である。

## 五 餘 論

以上筆者は黒陶、彩陶並に紅陶、或は夫れ等近似の土器が東南亞細亞に點々と見られる事を説いた。支那本土の黒陶と印度の黒陶らしきものとの關聯も俄に否定し得ないが、臺灣の黒陶は恐らく支那本土に直接結び附くものであらう。但し其の導入徑路に就ては、北支に直接連絡するものか、或は福建省の武平あたりを介して連絡するものかは今後の探究に待たねばならぬ。

彩陶の問題も同様であつて、此の土器の分布が支那本土の東端に於て陝西、山西兩省並に河北、河南兩省の一部に止り、山東、江蘇、安徽三省並に楊子江以南に未だ發見せられて居ない事は、北支と臺灣とを直接

連絡するに躊躇せしめる。殊にマグリオニ師の報告するが如く、廣東省海豐に彩陶が發見せられるとすれば、現在の處臺灣と海豐を結び附ける方が蓋然性がある。以上の考察はアンダーソンの見解に従ひ、北支彩陶が青海、甘肅を経て西方起源なりとする所說に従つたものであるが、青海、甘肅より北支に彩陶流傳の一派が延びると共に、又他の一派が青海、甘肅より四川、貴州、廣西諸省を経て廣東省に至つたとする假想的ルートも將來注意せられて可い。又インダス河畔のモヘンジォダロ遺跡に典型的なる彩陶が發見せられて居り、前掲印度各地に彩陶らしきものが少からず見られ、更に馬來半島ケダー、ネグリスミラン兩州に彩陶が認められる事は、アンダーソンの説く北方ルートの存在と共に、南方ルートの存在も否定し難いものである。而してフィリッピン各地に見られる彩陶、ミクロネシアに發見された彩陶<sup>9)</sup>も、此の南方ルートを假定して初めて容易に説明が附く事と思はれる。而して更に亞細亞大陸北部、並に北米大陸北部に彩陶が發見せられぬ以上、メキシコ、中央亞米利加、南米北部に特殊な發達を遂げた彩陶も、ポリネシアと南米との文化交



涉に關する多くの賛否兩論にかゝはらず、此の南方ルートによる傳播の一例として検討されて可い。

前述の如く、紅陶は單に北方系とは見做し得ず、夫れは東南亞細亞にも普遍的なるものとして可いのであるが、之れが印度各地に發見せられるとすれば、前掲彩陶の南方ルートに於けると同様なるルートを考へて可い様に思はれる。佛印各地の紅陶も前掲の考察より脱するものではないが、フィリッピン各地の紅陶は南方系紅陶と見るを蓋然性あり、フィジー諸島の紅陶もフィリッピンよりモルッカス諸島を経て小スンダ列島を含む地域の何れかより傳播したと考へる事は、メラネシア文化の西方起源説に徴し、考へられる事である。或る會合に於て八幡一郎氏提示のサイパン島紅陶は、其後筆者所藏のフィリッピン後期鐵器時代紅陶と比較するに寸分相違なき事を知つた。従つてフィリッピンとミクロネシア西部に於ける文化的交渉は、少くもフィリッピン鐵器時代後期に於てもあり、フィリッピンより紅陶が導へられたと見て間違ひない事と思はれる。而して臺灣の紅陶の第一類が同じくフィリッピン紅陶と同一であり、フィリッピンより導入された事

は明かであるが、臺灣紅陶の或るものには支那本土より流入したものであるかも知れない。此の問題は兩地材料の比較研究によつて明かとなるであらう。

以上筆者は東南亞細亞に於ける黒陶、紅陶並に彩陶に就いて、若干の事實と課題を提示した。大方諸賢の教示を望むと共に、此の問題が學界の注意に上り、次第に闡明される事を切望する。終りに臨み、此の問題を提示、筆者の興味を喚起された金關博士に對し謝意と敬意とを表する。

註 ①金關丈夫—臺灣先史時代に於ける北方文化の影響、臺灣文化論叢、頁一一六、昭和一八年一二月。

②鹿野忠雄—臺灣石器土器に見られる支那大陸系要素、(近刊拙著、東南亞細亞民族學先史學研究第一卷所收)

③國分直一—臺灣南部に於ける先史遺蹟とその遺物、南方民族、第六卷第三號、頁四五—六二、昭和一六年一月。

④「民俗臺灣」の餘白錢に一言指摘されたが、今其の號數を詳にしない。

⑤Lin Hsiung, Liang Huipin, & Lai Tzekuang—A Neolithic Site in Wujing, Fukien. 第三回臺東先史學會議報告, PP. 133—141, W. S. pls., 1940

- ⑥ Schofield, W. —The Proto-Historic Site of the Hong Kong Culture at Shek Pek, Lantau, Hong Kong. 第三回極東先史學會議報告, PP. 235—305, W. 26pls., 1940.
- ⑦ 國分直一—澎湖島良文港に於ける先史遺跡に就て、南方民族、第六卷第四號、頁五〇—五六、昭和十七年十二月。
- ⑧ 金關丈夫—前掲論文。
- ⑨ Magioni, R. —Some Aspects of South China Archaeological Finds. 第三回極東先史學會議報告, PP. 209—229, 1940.
- ⑩ Collings, H. D. —Report of an Archaeological Excavation in Kedah, Malay Peninsula. Bulletin of the Raffles Museum, Ser. B, no. 1, PP. 5—16, 1936.
- ⑪ Evans, I. H. N. —Papers on the Ethnology and Archaeology of the Malay Peninsula. London, 1927.
- ⑫ Koerber, A. L. —People of the Philippines, New York 1928.
- ⑬ 金關丈夫—前掲論文。
- ⑭ 鹿野忠雄—臺灣の赤色塗研土器(近刊拙著、東南亞細亞民族學先史學研究第一卷所收)
- ⑮ Parmentier, H. —Note d'archéologique indochinoise, vii. Dépôts de jarres à Sahayunh, Annam. BEFEO, xxiv, PP. 324—343, 1924.
- ⑯ Colani, M. —Notes pré-et protohistoriques, Province de Quang-Binh. Bulletin des Amis du Vieux Hué, no. 1, PP. 121—140, 1936.
- ⑰ Patte, E. —Le Kjekkenmøtting néolithique de Bau Tro a Tam Toa pres de Dong Hoi (Annam), BEFEO, xxiv, PP. 521—533, 1924.
- ⑱ Janse, O. —An Archaeological Expedition to Indo-China and the Philippines. Preliminary Report. Harvard Journal of Asiatic Studies. Harvard-Yenching Institute 1940.
- ⑲ Beyer, H. O. —Recent Discoveries in Philippine Archaeology.
- ⑳ Beyer, H. O. —Prehistoric Philippines. Manila, 1936.
- ㉑ Crowe, C. H. —Philippine Clay work. The Philippine Craftsman, vol. 1, no. 7, PP. 511—521, 1913.
- ㉒ 齊藤正雄—東印度の文化、頁四五七。
- ㉓ 鈴木政雄—バウ島遺物の出土状態を示す一例。南方土俗、第五卷第一、二號、頁五三—六一。
- ㉔ Mac Lachlan, R. R. C. —The Native Pottery of

the Fiji Islands. Journ. Polyn. Soc., vol. 49, PP. 243—271, 1940.

②③ Camniate, L. A.—Tangal, Chingleput District, Madras. Man, vol. xxx, no. 10, PP. 186—187, 1930.

②④ Camniate, L. A.—Observations upon Ancient Sites in the Neighbourhood of Kalugumalai, Madras. Man, vol. xxx, no. 10, PP. 187—189, 1930.

②⑤ Codrington, K.—Indian Cairn and Urn-Burials. Man, vol. xxx, no. 10, PP. 190—193, 1930.

②⑥ Hunt, E. H.—Megalthic Burials, in the Deccan. Proceedings of the First International Congress of Prehistoric and Protohistoric Sciences. PP. 267—269, London 1934.

②⑦ 三森定男—印度未開民族。

②⑧ Plenderleith, H. J.—Black-Polished Pottery from Urn-Burials in the Wynad. Man, vol. xxx, no. 10, P. 190, 1930.

②⑨ 松本信廣氏所蔵、詳細は同氏の發表に待つ、此處に詳細を差し控へる。

# 考 証 び

第二章彩陶のところ(十四頁上段)にはベリン岩陰避難所發掘彩陶片(コリングス原圖)の圖版を附けるはつてありましたが、印刷所が火災に遇つたため、遺憾ながら焼失しました。著者並びに讀者各位に深くお詫を申上ります。

編輯者